

芝木好子

明日を知らず

河出書房新社

明日を知らず

©1969

昭和44年7月20日 初版印刷

昭和44年7月25日 初版発行

著 者 芝木好子

発行者 中島隆之

印刷者 草刈龍平

定価 580 円

発行所 株式会社 河出書房新社
東京都千代田区神田小川町 3-6
電話 東京 (292) 3 7 1 1 (大代表)
振替 東京 1 0 8 0 2

明日を知らず

夕暮に丸の内の焼け残ったビルディングを出て東京駅へ向うと、浮浪者に行きあうことがある。人の去った建物の蔭や、皇居前の広場へ塹を求めにゆく彼等をみると、麻子は眼をそむけた。終戦から三年経っていたが、彼女は満洲から引揚げてきてまだ一年半にしかならなかった。浮浪者とさして変らぬ姿で戻ってきたのであった。引揚者と知ると、人は同情を示しながら、女がどんな目に遭ったかと探るような眼差を向けた。敗戦前後の辛酸を語ったところで、どうなるものでもないから、麻子はなにも喋る気になれなかった。

一日の勤めを終えると、疲れる。麻子は住む家にも困っていたし、冬に向って着る物にも事欠いたし、美味しいたべものを充分に味わうこともなかった。それでも平穏な日が続くことに胸を撫でおろし、ここは日本なのだと、歩いている道であたりを見廻すこともあった。戦争の終わった都会は重たい抑圧から放たれた明るさを感じさせるのであった。

東京駅のホームは勤め帰りの人であふれている。電車が次々と入ってきたが、どっと乗りこむ人たちで扉は締らないほどであった。むりやり肩から乗り入れた男が、締る扉に抵抗しながらようやく靴先を押しこみ、倒れこみながら扉にふさがれるのを麻子は見ていた。駅員が走ってきて合図すると、電車はホームを離れてゆく。このありふれた光景を見るたびに、彼女は人間を積みこむだけ積みこんで運んだ引揚げの無蓋列車を思い出すのであった。あの列車に比べると、ここには屋根がある。退け時の混雑に気押されていると、電車は何台待っても乗れはしない。行列にしっかりとついて空電車に殺到しながら、機敏に座席へ滑りこまなければ、掛けることは出来なかった。それは一瞬の生存競争であったから、誰もなりふりかまわなかった。ぐずぐずしていると突きとばされたり、足を蹴られたりした。麻子は掛けられないでやっと釣革につかまると、無蓋列車に乘せられた新京の駅のことを連想した。すぐ発車すると思った引揚げ列車はいつでも動かずに、半日もたってしまい、降ろされるのではないかと不安を抱かせた。ようやくして日没の駅から列車が動きはじめた時の気の遠くなるような虚脱感を、いまでも忘れることはなかった。

東京の暮れ方の電車の窓からは、焼跡のままの空地と、その向うに皇居の濠端ものぞめた。混んだ電車の人の顔はみなくすんで彼女の眼にとまることはなく、窓硝子に彼女は一つの顔を思い描いた。いつも東京を離れると糸の切れた風船のように行き方しれずになる緒方修のことであっ

た。東京の町が少しずつ体裁を調べて、放物資も出廻り、GIも歩いているとき、緒方はやはりリュックを肩にして地方の開拓部落をまわっているのであった。一度でよい、彼の出張についてゆきたいと麻子は思っていた。やっと帰ってきて彼はなにも語ろうとしないからであった。開拓民援護会が引揚者の状況を調べはじめたのはその年の春からであった。彼の日常はそのために忙しくなつて、それだけ二人の逢う瀬は少くなつた。

今度の出張は長野県と知つたときから、麻子についてゆくことに決めた。いつもは緒方に向つていつ帰るかと思ねる彼女が、せっせと旅の支度をはじめて、ズボンを友達に借りたり、旅費を叔母の和歌子に手紙で無心したりした。緒方は初めから同意するわけがなく、無理だといって相手にしなかつた。彼にとっては仕事であつたし、女をつれてゆくには不似合な場所であつた。麻子が生き生きした表情で旅のことを口にする、

「どんな処に寝るか、考えてみるといい」

とも言つた。そこへゆくのに麻子は自分を不似合と思つていない。満洲開拓地の引揚者の労苦はつぶさに見てきたし、彼女自身も引揚者であつた。女がついていって緒方の迷惑になるなら、行けるところまで行つて旅館で待つていてもよかつたし、手伝えるなら入植地でなんでもしたいと思つた。そのことを口にする代りに、

「秋の高原はいいでしょうねえ、どうしても行く」

と呑気らしく押しきった。

「無理だというのが分からないのかな」

緒方はそのときも困った顔をした。

「慰問ならかまわないでしょう、芋飴を持って開拓村へ行くからいい」

麻子の一途さに緒方は黙ってしまい、それなりになった。彼が長野の帰りに妻のいる群馬県境に寄るなら、それはそれでかまわなかった。いられるだけ一緒にいて旅をすればそれでよかった。出発が近づくこと仕事も手につかなくなって、念のために緒方の勤め先へ電話を試みた。出たのは別の男で、

「緒方さんはいませんね」

素気ない声であった。

「すぐお帰りになるでしょうか」

「さあ、地方へ出張ですから」

麻子はどきっとした。

「出発は、明日でしょうか？」

急ぎこんで訊ねた。その通り明日とわかると、ほっとして受話器をおいた。緒方はだしぬいて行ったのではなかった。あとは叔母のところへ旅費の工面に行くだけであった。一緒に新京を引揚げてきた叔母夫婦にゆとりのあるはずはないが、考えていては借金の無心は出来ない。自分本位にふるまうに限った。

誰かの視線を頬に感じて、彼女は眼をあげた。押しあいながら立っている電車で、すぐ近くに
いる中背のおだやかな感じの三十歳ほどの男が、待っていたように会釈した。

「いま、お帰りですか」

男は声をかけてから、上体をこちらへ寄せてきた。揺れると肩のぶつかるところへきていた。

「岸井です、この間はお手数をかけました」

麻子は男の親しみやすい声を聞きながら、ようやく思い出した。彼女は旧財閥の資料室に臨時の勤めをしていたが、資料を借りにくる人間の出入りは多かった。

「資料室のほうは、長いのですか」

「いいえ」

と麻子はそっけない返事をした。

「お茶の水で降りるのじゃありませんか」

男は窓の外を見ながら言った。麻子はずっと先までゆくはずであった。

「なぜですか」

「この間、前を歩いていましたよ」

「ああ、時々行きますから」

彼女はあわてていた。お茶の水のある会館で気まぐれにフランス語を習っていたが、かつかつ暮らしていて、レッスンなどと言えたものではなかった。高い月謝を払って習ったところで目的があるではなし、好きというほどでもない。舌をころばす発音をたのしむだけのもので、今こんな自由を手に行っているという証しを、自分で立てているにすぎなかった。

「すると月曜日に行くのでしょうか。僕もあの近くの定時制高校へ教えにいらしてね」

男の息がかかる気がして、麻子は顔を引いた。人中で自分のことをすらすら喋る相手におどろかされた。どんな些細なことにも、彼女は人の顔色をみるくせが抜けなかったし、まわりにいる人間の耳を意識せずにいられなかった。彼は平気で話していた。駅の近くに珈琲専門の店があって、モカが美味いと教えてくれた。香りのよい珈琲は進駐軍の闇物資に違いがないと思うと、その話題にも彼女はあたりへ気を兼ねた。電車はそのうちお茶の水のホームへ滑りこんでいた。なにか話しかけた彼は急いで別れを告げると、停った電車の扉に向けて肩を押していった。降りただ

けの人数はすぐ乗りこんで、発車した。日本中の入植地へ送りこまれた満洲開拓団の引揚者を調査にゆく男の足手まといになることを、彼女は考えはじめた。

この電車の外れ、武蔵野のおもかげを宿す国分寺駅にくると、もう乗客は少くなっている。この線の先にアメリカ軍の基地があるせいか、長身の兵隊と一緒に派手な日本の女が乗りこんでくることがあった。さびしい駅から北へ二十分も歩かなければ、叔母の和歌子のところへ着くことは出来ない。駅から支線はあったが、ごくたまにしか通らない電車なので、あてにはならなかった。木立の多い武蔵野の住宅地はどの家も大きな樺や栗の木を抱えてどっしりしていた。叔母夫婦の寄宿している家は外れで、その先は雑木林であった。門から離れへ渡ってゆくと、灯のついた座敷の縁先に和歌子は立っていた。短かめの髪をきりっと掻き上げて、黒い大きな眼でこちらを見ている中年の叔母は、手編みの紫色のセーターに黒いスカートで、ほっそりしていた。麻子はこの叔母に似ていると人に言われた。

「遅いじゃないの」

それが和歌子の挨拶であった。

「電車が混むのよ」

そんなことはわかって、というように彼女は別のことをいった。

「叔父さんがお風呂を焚いて、待ってるわ」

六畳と、狭い水屋しかないこの離れの横に、トタン板で囲った野天風呂があった。秋のはじめにそこへ屋根をつけたのも和歌子の良人の楠田容造の素人大工であった。焚物は手近な雑木林から枯枝をひろってきた。

「早く上りなさいよ」

和歌子は時たまくる麻子を待ちかねながら、やさしい調子で物を言ったことはない。灯の下の彼女は肌理の美しい素顔で、四十代のなかばにしては髪に白髪がまじっていた。髪がしなやかで艶のあるのを自慢したこともあったが、敗戦後の満洲から引揚げてきたある日、鏡にうつすと黒髪の生え際から斜めに一条の白髪が走っていた。彼女はその筋を隠そうとしなかった。

庭をまわって容造が入ってきた。彼のふさふさした髪も、めっきり白くなっている。女たちに向って、風呂の加減のよさを告げた。風呂は月明りで入るのだった。

「あなたってお風呂を燃すのに情熱を感じているようね」

和歌子は良人へ言った。

「火が燃えるのはいいからね。ぼんやり赤い焰を見ていると気分が休まる」

一日中翻訳の仕事をしている容造には気分転換になるに違いない。彼の机は縁先に向いてい

て、和歌子の小机は裏窓に備えてある。からだの弱った和歌子は時々床について、一日中容造の背中を見て暮すこともあった。寝ていても気性は勝っていて、弱音を吐くことはない。容造は笑いながら麻子へ言った。

「このひとは人使いが荒くて困る。風呂を焚いている間、遊んでいると思っているのだ」

子供のない夫婦が二十何年も密着して暮していると兄妹にみえた。この夫婦の結婚にさまざまなトラブルがあったのも、和歌子が変わった生き方をしてきたからであろう。麻子の母などは義妹の和歌子に娘を近づけまいとしたこともあった。

座敷には夕食が調っていて、食事を先にしたい和歌子と、風呂へ入りたい容造とは、麻子の顔を眺めた。

「おながが空いているのよ、お風呂へ入ったら眼がまわるわ」

食べても食べても満腹感のない栄養失調の名残りがあって、麻子は空腹になると不安を覚える。食卓には刺身があつて、わさびまでついているし、ベーコンと野菜のいために、清汁すましも添えてある。和歌子は姪のくる日は精いっぱいのことをする。敗戦後の新京での困窮した生活に、刺身は夢のような御馳走であった。容造は押入れから大事そうに白葡萄酒を出してきた。

「麻ちゃん飲んでごらん、血色がよくなるぞ」

容造の注ぐ三つのコップは母屋から貰ったもので、ばらばらであった。満洲の嚴寒に堪えるために酒をたしなんだ女たちは、酒に弱くはない。生の白葡萄酒は久しぶりに麻子の喉に浸み透った。そのあとのとろけるようなまぐろの刺身の舌ざわりのやわらかさに、眼を細めた。東京に行き場のない彼女は、いま絵を描く友達のアトリエに転がりこんでいたが、彼女たちの食事はいつも出まかせであった。

「美味しいわ、信じられないわ」

物の味わいの深さ、魚の肌身のおまさ、肉の繊維の一筋にまで吸うべき味があった。口にしたものがあるところなく血や肉になる手応えを覚えた。おいしさと食事の和やかさは、心をやすめる。早くたべては惜しいので、ゆっくり葡萄酒を嘗めた。

「食後に、も一つ良いものがある」

容造は早くも口を割った。

「おしゃべりなひと」

和歌子は不服そうに良人をみた。食事がすむと、容造は大事なものを更にも一つ出してきた。

「この二つを手に入れるのに、どうしたと思う」

その貴重品は珈琲であった。彼のところへくる編集者が、横浜に物資を流す店のあるのを教え

てくれたのはつい先頃である。容造は稿料が入ったとき出かけていった。伊勢佐木町の賑やかな通りの裏にある、カウンターをまわした小さな薄暗い喫茶店で、中年の男が一人で仕切っていた。容造はうまい珈琲を飲ましてもらいながら主人と世間話をしているうち、この店の常連に旧友のいることが分かった。話がほぐれてゆくと、主人は気前よく白葡萄酒と珈琲を分けてくれた。珈琲はこの店で使うミックスを紙袋に詰めてくれたのである。わざわざ来ただけの収穫はあったと、よろこんで帰途についた。

夜の電車の釣革につかまっていた彼は、隣りへ警官が寄ってきたのに気付いて、ぎょっとした。警官は黙って立っている。するうち手に持った紙包みからいがらっぽい珈琲の匂いが立つのに、気が気でなくなった。外国の闇物資は没収されて罰をくう。じっとり汗が滲んできた。身動きすると匂いがばらまかれそうであった。ようやく下車する駅にきて、警官のわきをすりぬけて降りたが、うしろを振向けない。いまにも肩に手がかかるかと思った。電車は走り去った。

「記念すべき物資ね」

麻子は珈琲の紙袋を手にとってみた。ふと電車の中で会った男の顔をちらと思い浮かべた。食後に珈琲があるのはうれしい。たいそうな贅沢である。彼女の収入では珈琲代と食事代を見合わせる必要はなかった。

「一日に一回、コーヒーの飲む暮しをしたい」

と麻子は言った。ほんのりと白葡萄酒に赤らんだ彼女の頬を、和歌子は眺めていた。

「早く勤めを替えなさい、人間らしく暮すのよ」

「旅から帰ってきたら」

新しい勤め口は和歌子が口をきいた雑誌社であった。麻子は資料室の給料では暮していけなかったで、少しでも待遇のよい勤め先へ移らなければならなかった。仕事を選んでいる暇はない、生きることが先であった。給料のあらましは食べることの満足にあてられて、胃袋が充ちてから、まわりへ眼が向くのであった。

「その雑誌社は新しいでしょう」

「そう、活気のある編集部よ。せいぜい積極的にやってみるのね」

和歌子は言ってから、容造をちらと見た。せいぜいやってみろというのは、彼が妻に二十年間言い続けてきた口癖であった。

「なにを、顔見ているんです」

「お前さんが言うとお合わないね」

容造は口許をゆるめて、長年辛抱強くつれそった妻を冷やかした。夫婦は育った環境が違って